

***登録有形文化財に答申された国立天文台レプソルド子午儀室**

アーカイブ新聞第706号に「登録有形文化財になった国立天文台表門」、第707号に「登録有形文化財になった国立天文台門衛所」、第708号に「登録有形文化財になった国立天文台旧図書館及び倉庫」という記事を書いた。2013年11月15日の文化庁文化審議会で国立天文台の7件の建造物が登録有形文化財として文部科学大臣に答申されたのである。今回はその中の一つ「国立天文台レプソルド子午儀室」について書く。国立天文台は1988年に設立された文部省直轄の大学共同利用機関であったが、2004年に設立された大学共同利用機関法人「自然科学研究機構」の一員となった。その前身の一つである東京大学東京天文台は1888年に麻布区飯倉に設立された。東京の中心の麻布から暗い空と広大な敷地を三鷹村に土地を求め、1924年9月に移転した。1923年の関東大震災で麻布にあった観測器械は壊滅的な損害を受けたが、レプソルド子午儀は、おそらく移転のため架台から降ろされ梱包状態だったため破壊をまぬがれ、三鷹に移転した。三鷹のレプソルド子午儀のための子午儀室(写真1)は大正14年2月28日に竣工している。床面積は36平米である。



写真1 現在のレプソルド子午儀室(子午儀資料館)

レプソルド子午儀は、1880年ドイツで製作され、1881年当時の海軍省海軍天文台が当時の価格、12500 マルクで購入し、1888年東京天文台発足時に海軍天文台から東京天文台に移管された。レプソルド子午儀は明治期の基幹望遠鏡の一つで麻布にあったころは、時刻の決定、経度測量に使われた。三鷹に移転後は、1935年(昭和10年)以後、主な小惑星、大惑星、月などの赤経観測に使われ、1937年(昭和12年)以後には、約3万個の黄道帯恒

星の赤経観測が 1943 年（昭和 18 年）までの 6 年間に行われ、黄道帯星表として出版された。先の大戦中は戦火を免れるため格納されていたが、1950 年（昭和 25 年）から 1959 年（昭和 34 年）にかけて、赤道帯恒星 4135 星の赤道帯星表が出版され役目を終えた。

役目を終えたレプソルド子午儀室は天文時部関係の倉庫と化し、数十年を経る間にレプソルド子午儀の存在が天文台職員から忘れ去れていた。レプソルド子午儀室は荒れ果て無残な姿をさらしていたが、2007 年（平成 19 年）国立天文台の常時公開エリアを 2 倍強に拡大する際、建物の外観のみを公開する予定であったが、筆者がレプソルド子午儀の存在を発見し、建物の修復(写真 2)を進めると同時に、レプソルド子午儀の復元、整備を行い望遠鏡本体も見学の対象にした(写真 3)。それと同時に 130 年近い年月を経た望遠鏡が原形をとどめて現存していたので、重要文化財に申請していたところ、2011 年 6 月に国の重要文化財に指定された。



写真 2 修復を進めたレプソルド子午儀室



写真 3 重要文化財に指定されたレプソルド子午儀

レプソルド子午儀室の建設時の図面が残っている（図1）。図1にも記載があるが、当然のことながらこの建物は、観測のために屋根が東西に開く。この駆動機構も現存している。

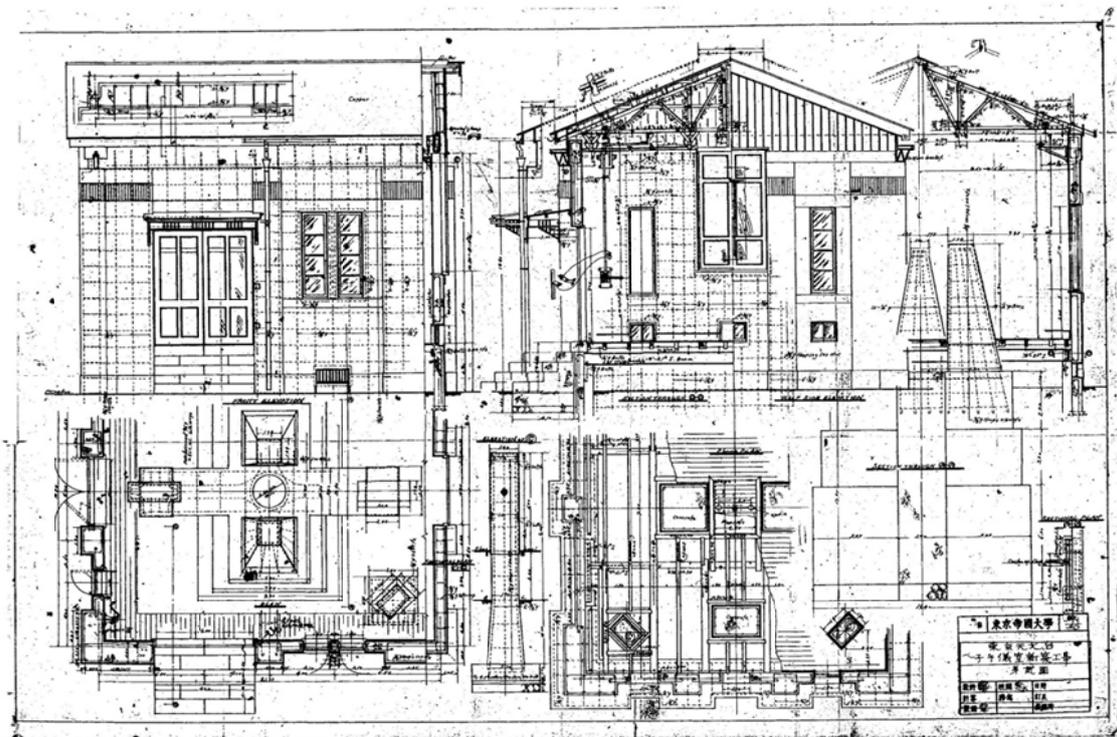


図1 建設時の図面

屋根はレール上の車輪の上に乗っており（写真3）、開閉機構は手動のハンドル（写真4）を廻し、傘歯車、長いロッドを経て平歯車（写真5）によって開閉することができる。車輪の載ったレールは屋外に約30 cm突き出ている（写真6）。屋根が開閉するため、雨樋の垂直樋の一部はフレキシブルになっている（写真7）。



写真3

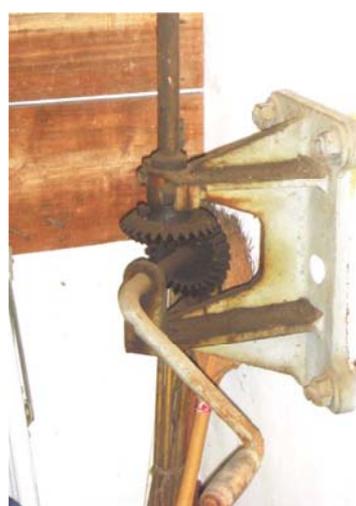


写真4

この建物の屋根は、外観は単純な切妻造りだが建物自体は鉄筋コンクリート造りで、そ

の上部には背セッションと呼ばれる装飾が施してある(写真8)。



写真5 屋根開閉の平歯車



写真6 外に出たレール

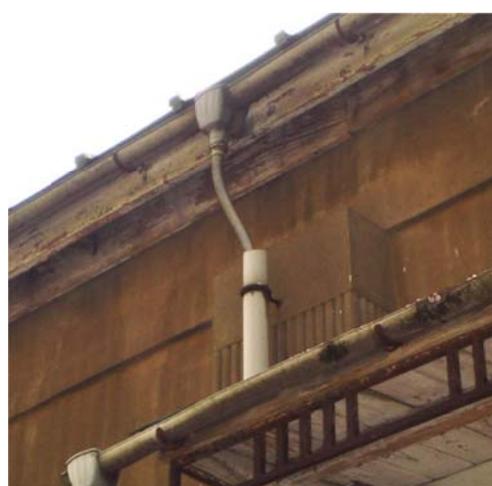


写真7 フレキシブル樋



写真8 外壁上部の装飾 セセッション紋様

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp